CampbellCollaboration

Plain Language Summary
Crime and Justice

2019

親密なパートナーからの暴力を受けた子どもたちの幸福を促進するための心理社会的介入の有効性に関する限られたエビデンス

心理社会的介入が親密なパートナーからの暴力(= IPV / intimate partner violence)にさられた子どもたちの幸福をどの程度促進するのか、またどのような状況下で促進するのかは、ほとんど明らかではない。

このレビューの目的は何か？

このキャンベルの系統的レビューでは、親密なパートナーからの暴力にさられている子どもの幸福を促進するための心理社会的介入の効果を検討している。
このレビューでは、8件の方法論的に厳密なランダム化比較試験からのエビデンスが要約されている。

子どもが親密なパートナーからの暴力(IPV)にさられることは、公衆衛生および社会正義の重要な問題であり、深刻で長期的な影響を及ぼす可能性がある。心理社会的介入がIPVにさられている子どもたちの幸福をどの程度促進するのか、また、どのような状況下で、どのような方法で、どのように設定するのかは不明である。

このレビューの目的は何か？

小児期にIPVにさられることは、健康と幸福に短期的および長期的に悪影響を及ぼし、それは世代を超えて持続する可能性がある。そのため、IPVにさられた後の幸福を促進するための介入戦略の開発に関心が高まっている。過去20年以上にわたり、暴力にさられた子どもたちを対象とした理論に基づいた心理社会的プログラムが開発され、さまざまな場(学校を基盤とした精神保健診療所、外来の心理療法の場など)で確立されてきた。本レビューでは、この文献の状況と研究と実践への示唆を総合的に示している。

具体的には、総合的な問題、外部化する苦痛、内部化する苦痛、対人/社会的問題、および認知機能の改善における心理社会的介入の有効性が評価されている。介入のモダリティ(例:個人、家族ベース)および介入の設定(例:在宅、外来診療所)による効果の変動も検討される。

どのような研究が含まれているか？

本レビューには8件のランダム化比較試験(RCT)が含まれ、合計924人が参加している。研究の大部分は米国で実施され、オランダとインドでそれぞれ1件ずつ実施された。対象となる子供の年齢層は様々であったが、すべての研究が0～18歳の範囲内であった。

3つの研究では、IPVにさられたことのある親や子どもの一般集団を対象としており、親や子どもの症状や機能に関する包括基準は明記されていない。4つの研究では、IPVに関連した心的外傷後ストレス障害(PTSD)の症状を持つ子どもやアルコール依存症の父親など、より明確な包括要件が設定されている。親が経験したIPVの性質や、子どもが目撃したり聞いたりしたIPVの性質についての研究は、多岐にわたっている。

このレビューはどれくらい最新のものか？
レビュー執筆者が2018年4月までの研究を検索した。

キャンベル共同研究とは何か？
キャンベル共同計画とは、系統的レビューを公表する、国際的、任意的、非営利的な研究ネットワークである。本組織は、社会科学や行動科学の領域における取り組みのエビデンスを要約し、その質を評価している。本組織の目的は、人々のより良い選択とより良い政策決定を支援することである。

この要約について
本要約は、Natasha E. Latzman, Cecilia Casanueva, Julia Brinton , Valerie Lらによるキャンベル系統的レビュー" The promotion of well-being among children exposed to intimate partner violence: a systematic review of interventions"に基づいている。Latzman、Cecilia Casanueva、Julia Brinton、Valerie L. Forman-Hoffman,Forman-Hoffman,Jacobs Foundationらはこのレビューに資金を提供している。

この要約の作成のためのアメリカ研究機関からの財政支援に感謝の意を表する。

このレビューの主な知見は何か？
研究では、総合的な問題、外部化する苦痛、内部化する苦痛、対人・社会的問題、認知機能などの結果が検討された。しかし、使用された特定の尺度、採用された介入、比較群の違いにより、所見を総合的に判断する能力が制限されている。

2つの研究から得られたエビデンスは、家庭内集中サービス（親のトレーニングと親への情緒的支援の提供）が、IPVにさらされ、臨床レベルの行動問題を抱える子どもの外向的行動を減少させるという予備的なエビデンスがあることを示唆している。しかし、このエビデンスの支持する結果は治療直後と8ヶ月の追跡調査でのみ認められたが、4ヶ月の追跡調査では認められなかった。

問題のない親（母親）を対象とした介入が最も効果が大きく、次いで家族を一緒に対象としたもの、最後に親子を別々に対象としたものであった。

家庭内で実施された介入は、外来で実施された介入に比べて効果が大きかった。しかし、比較対象者の性質など研究の特徴が不均一であるため、これらの知見は慎重に解釈されるべきである。

全体として、心理社会的介入がIPVにさらされた子どもたちの幸福をどの程度促進するのか、また、どのような状況下で促進するのか、ほとんど明らかになっていない。

レビューの結果は何を意味するのか？
この系統的レビューから得られた知見は、心理社会的介入がIPVにさらされている子どもの間でどの程度、どのような状況下で幸福を促進しているのか、ほとんど明らかになっていないということである。結論を出すためには、研究間で共通のアウトカムを用いて心理社会的介入のより厳密な評価を行う必要がある。

我々は、評価デザインの厳密性を高めること（選択バイアスを最小化する努力など）に加えて、研究者が子どもの曝露の性質とIPVの複数のサブタイプを評価することを提案する。これは、介入がIPV曝露の状況に応じて効果が高いか低いかを解明するのに役立つであろう。

AIR®
AMERICAN INSTITUTES FOR RESEARCH®